

愛知県常滑市（国内17例目）の高病原性鳥インフルエンザ発生農場に係る
疫学調査チームの現地調査概要

令和7年1月2日に実施した現地調査により、以下のことを確認した。

1 基本情報

用途（飼養羽数）：採卵鶏（約14.7万羽）
発生家きん舎の構造：高床開放鶏舎（成鶏3）
発生家きん舎の飼養形態：ケージ飼い（ひな壇4段ケージ8列、通路4本）

2 施設の周辺環境・農場概況

- ① 当該農場は、海沿いの丘陵地にある養鶏団地の一角に位置する。養鶏団地の周辺は収穫済みの水田が広がり、二番穂が出ているところもあった。
- ② 農場北に約1km及び東に約1.2kmにあるため池でバン、カイツブリ等水きん類を確認した。
- ③ 当該農場には、高床式開放鶏舎3棟（成鶏舎1棟、大雛舎2棟）、ウインドウレス鶏舎2棟（成鶏舎2棟）及び開放鶏舎2棟（育雛舎2棟）、集卵施設2棟、堆肥舎5棟、事務所、倉庫で構成されていた。集卵施設は、発生鶏舎である成鶏舎3専用のもので、ウインドウレス鶏舎である成鶏舎1及び2で利用するものに分かれていた。農場敷地内には資機材が整頓されずに置かれていた。
- ④ 当該農場の北側隣には、廃業した家きん農場があり、空き鶏舎が複数あったほか、敷地内では雑草が繁茂していた。

3 通報までの経緯

- ① 農場主によると、12月26日から発生鶏舎（約2.3万羽、通報時約500日齢）において、誘導換羽のため給餌量を通常時の2割程度に減らしていたところ、29日には28羽死亡し、30日及び31日にはそれぞれ68羽及び70羽散在して死亡が確認された（28日以前の21日間の平均死亡羽数は約7羽）。この2日間は冷え込んだ（常滑市の最低気温30日1.9℃、31日2.9℃）こともあり、誘導換羽に寒冷感作が重なったものと判断し餌の量を増やしたが、1月1日に死亡羽数が257羽まで増加し、また、鶏舎で最も北の列の鶏舎入り口から約15mの最上段及び2段目のケージ及びその周辺ケージにおいて死亡鶏がまとまって確認されたため、同日、家畜保健衛生所に通報したとのこと。なお、誘導換羽は、飼養羽数の約1%（約200羽）を期間を通した死亡羽数の上限目安として、1週間程度給餌量を減らしていたとのこと。
- ② 調査時、通報があった発生ケージの周辺で複数の死亡鶏が確認されたが、その他の列では死亡鶏は少なかった。また、その他の非発生鶏舎では、特に異状は確認されなかった。

4 管理人及び従業員

- ① 当該農場には、農場主を含め従業員が12名おり、農場主を含む7名が鶏舎での飼養管理作業に従事し、その他5名が堆肥処理等の作業に従事しているとのこと。鶏舎の飼養管理については、それぞれ鶏舎ごとに専属の者を置いていたとのこと。また、集卵施設での作業については、成鶏舎の担当者が行っていたとのこと。

5 施設の飼養衛生管理

- ① 農場は、西側に成鶏舎3棟、育雛舎2棟、集卵施設2棟及び堆肥舎（発酵ハウス）2棟からなる衛生管理区域（衛生管理区域①）があり、東側に大雛舎2棟及び堆肥舎（乾燥ハウス、製品倉庫）3棟からなる別の衛生管理区域（衛生管理区域②）があった。これら2つの衛生管理区域の間に公道が北東から南西に走っていた。
- ② 動力噴霧器による車両消毒ゲートが農場入り口及び衛生管理区域①の手前に設置さ

れており、入場者自らによって消毒が行われているとのこと。

- ③ 農場作業者は、衛生管理区域①の手前にある事務所において衛生管理区域専用の作業着及び長靴に交換するとのこと。また、ワクチン接種業者等、衛生管理区域①に立入る外来者については、専用の作業着は支給していない（業者が専用の衣服を持参）が、長靴の交換は飼養衛生管理区域に立入る際に農場で準備したものに交換していたとのこと。衛生管理区域②に立入る外部の者は、事務所の手前にある外来者用着替えコンテナで鶏舎専用の作業着に着替えるとのこと。
- ④ 外来者が衛生管理区域①の鶏舎内に立入る際は、鶏舎入り口において、農場から貸与された長靴に履き替え、手指消毒の上、立入るとのこと。
- ⑤ 従業員が入場する際は、鶏舎入り口において専用の長靴に交換したうえで、踏込み消毒及び手指消毒を行い立入っていたとのこと。なお、踏込み消毒の薬剤は逆性石鹼で、原則汚れたら交換（少なくとも3～4日に一度交換）していたとのこと。
- ⑥ 他農場との機材の共用はないとのこと。また、卵の出荷の際、系列農場含め近隣農場等と同じトラックで出荷はしていないとのこと。
- ⑦ 各鶏舎の周囲には、1か月に1回程度消石灰を散布し、雨の後は再度散布していたとのこと。また、12月中旬に、管理獣医師の指導により、鶏舎内においても消石灰を散布したとのこと。
- ⑧ 飼料タンクは、衛生管理区域内の場内道路の脇に設置されており、飼料搬入業者は鶏舎に近寄ることなく飼料を納入できる構造となっていた。育雛舎以外の鶏舎については、飼料は閉鎖系ラインで鶏舎に供給され、タンク上部には蓋が設置されていたが、成鶏舎1の飼料供給管に一部破損が認められ、飼料が漏れていた。育雛舎については、飼料をタンクから台車に積み替え、手給餌を行っており、タンク下には飼料こぼれが認められた。
- ⑨ 給水には塩素消毒した地下水を利用しているとのこと。
- ⑩ 鶏舎ごとにオールイン・オールアウトを行っており、オールアウト後に1～2週間の空舎期間を設け、鶏舎の洗浄と消毒を行っていたとのこと。直近のオールイン・オールアウトは成鶏舎1において、約100日前とのことであった。
- ⑪ 鶏糞については、発生鶏舎は高床式鶏舎であり、数か月間除糞をしていなかったとのこと。なお、ウインドウレス鶏舎では、4日に1回鶏舎から除糞ベルトで搬出後トラックに積み替え、堆肥舎まで運搬しているとのこと。鶏糞を発酵・乾燥させる建屋は5か所あり、それぞれ防鳥ネット（約2cm×2cm）が設置されていたが、隙間が多く、調査時、発生鶏舎の隣の堆肥舎では、カラス、スズメが複数羽観察された。また、ウインドウレス鶏舎の鶏糞ピットの落とし口に蓋はされておらず、鶏糞積み替え場所も開放されていたため、落とし口を通じて、野生動物の侵入が可能であると考えられた。
- ⑫ 鶏卵用のバーコンベアには上部にカバーがされていたが、鶏舎との接続部にふたはされていなかったため、集卵施設から、バーコンベアを介して小動物の侵入が可能であると考えられた。
- ⑬ 農場主によると、死亡鶏は見回りの際に回収し、毎日農場に2つある焼却炉で焼却していたとのこと。夏季暑熱時の大量死等で、死亡鶏が焼却しきれなかった場合に限って、鶏糞堆肥に混ぜ、堆肥化をした。現地調査時、発生鶏舎横には鶏糞堆肥が置かれており、防鳥ネットは張られていなかったが、夏季に死亡鶏の堆肥化を行っていた時は、野犬除けのため、ブルーシートで覆いを掛けていたとのこと。

廃棄卵については、堆肥舎（発酵ハウス）に入れた後、生糞を上から被せて堆肥化しているとのこと。
- ⑭ 発生鶏舎で使用されている防鳥ネットについては、2階の鶏舎部分は目が1辺約1cmの亀甲型、1階の鶏糞を置く部分では目が1辺約2cmの正方形のネットを使用していた（発生鶏舎の出入口の一隅のみ4cm角。）また、秋～冬については、カーテンを常におろしているとのことであった。防鳥ネット及びカーテンはところどころ破損が認められた。また、発生鶏舎専用の集卵施設の壁には破損部があり、集卵施設と発生鶏舎の間にはドア等遮蔽物がないため、破損部を介して野鳥の侵入が可能で

あると考えられた。

6 野鳥・野生動物対策

- ① 調査時、当該農場周辺の雑木林や電信柱に多数のカラスを確認し、前述のとおり、堆肥舎でカラス類やスズメを確認したほか、環境検査材料の採材時に、発生鶏舎の北側の敷地内で死亡したハシブトカラスが回収され、後日高病原性鳥インフルエンザウイルス陽性であることが確認された。また、発生鶏舎専用の集卵施設内で野良猫を確認した。
- ② 農場主によると、ネズミ対策としてペストコントロール業者と契約し、1か月に1回、殺鼠剤や毒餌の散布を行っているとのこと。

(以上)